

## 平成艸紙



### おりおりの記

冬は概して気まぐれです。この冬はとくにそうです。もともと暖冬と言われていました。年の瀬には、鹿児島島の菜の花畑が一面黄色に染まり、私が住む鎌倉の緋寒桜も一足早く綻んでいました。ところが、それも東の間、年が改まると、急に冬将軍が襲来し、沖縄ではみぞれが降り、奄美大島も百年振りの雪に見舞われました。二月に入ると今度は、低気圧がもたらした初夏の陽気です。気まぐれもここまでくると、狂気です。蠟梅は見頃を楽しむ間もなく終わりました。多分、早咲きの河津桜もすぐに散ってしまうでしょう。結局、冬の気まぐれに煽られて、暖冬だったような、そうでなかったような、変化の激しい冬を過ごしたことになるに違いありません。気まぐれは、人間の場合もそうですが、付き合いが難しい。

暖冬と言われる中で寒波に襲われて、暖冬の反対語は何だろうかとふと気になりました。気象庁は「寒冬」と言っています。どうもぴんときません。私が持っている広辞苑には、「厳冬」はありますが、「寒冬」は出ていません。「寒暖」という対語に拘らずに、「厳冬」にすればよさそうです。

皆さんが本誌を手取る頃には、春の気配がすっかり濃くなり、桜の見頃や花見酒のことが話題になっていることでしょう。気持ちは明るくなり、何となく浮き足立ってもきます。伸びやかで温かい春は、誰にも拒絶できない包容力があります。ただ私は、ここ数年、この春が今ひとつ好きになれなくなっています。年を取るにつれて、華やぐ季節に馴染めなくなっているのかもしれませんが。あるいは、春の後にすぐやってくる、あの長い、

## 二月に思う

日興リサーチセンター  
理事長

山口 廣秀

暴力的に暑い夏を想像しただけで、春を楽しめなくなっているのかもしれませんが。いずれにしても、春よりは、秋の落ち着きと静けさが嬉しいと思うようになっています。



歌人、文人は、昔から秋をたくさん語っています。西行が詠んだように、「おしなべてものを思わぬ人にさへ心をつくる」のが秋です。ましてや感受性豊かな歌人たちは、秋の微妙な動きにいつも心を揺さぶられてきたのでしょう。季節を語ることが好きだった幸田文は、「季節のかたみ」の中で、秋らしいものとして、「まっ赤な楓、まっ黄いろな公孫樹、柿栗のみのり、澄んだ空、結ぶ露、食器の音、家人の声のもの懐しさなど」をあげています。時代が変わり、社会が変わって、「食器の音」や「家人の声」に秋を感じるかどうかは人によるでしょう。しかし、秋の奥行き深さに変わりはありません。春が勢いを得ようとしている時に、秋を思うとほっとします。

やがて春が終わり、熱帯のような夏がやってくるでしょう。そんな夏が短く過ぎ、四季の国の、多少移り気ではあっても、落ち着いた静かな秋が来ることを今から願っています。